

校訂
讀本

普稻
及垣
舍千
著穎
閱

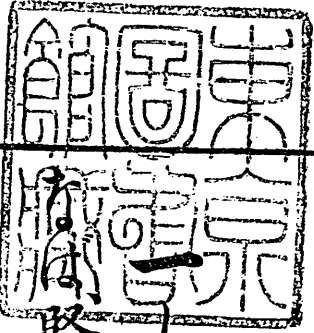
第四

館藏書會百數本日大			
六	六	五	二
六册	六號	五架	五函

178
3
62

K/20.8
7

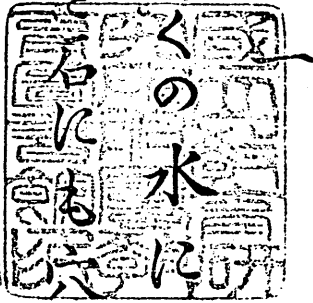
No 456



校訂 讀本第四

稻垣千穎閣

普及舍著



少一づつ學びても、絶間なく、ち
 ば、遂に其の志したる道に達さべし
 ても、絶間なく、ち
 を穿つべし 故に

讀

本

第四

普及舍著

たとへば一日あづかに一字づゝ覺
ても一年につもれば三百六十五字を
覺ゆるがごとし

二

脩身といふ心をすなほに言を慎み、
身の行を正しくするをいふ

三

人の一生を四季にたとふれば、
なまことまの春にして、成長の時の夏な
り、やく衰ふるごまの秋にして、既に老
いたる時の冬なり 春と夏との間に、
よくつとめ學びて、才能の種を蒔かず
ば、秋に至りて智識たらざしてひとつ
だに成し得ることなく、冬にのりみて

讀 本 第 四 三 善 才 合 善 片

空しく怨み歎くともかひなかるべし

四

人として物のことはりを辨へ、事の
よしあしを分つこと能はざるものゝ、
形の人なれども心はとりけだものゝにひ
とくばづべきことなり

五

人の飲むべきもの多し、水あり、ちく
あり、又茶酒エツヒイ等あり、其の中に
て最良きものゝ水と乳とにして、茶エ
ツヒイこれにつぐ、茶とエツヒイと
の精神をさしはやかにし、水と乳との最
健康に補あり、酒の人をして酔はし
むるものにして、最健康に害あれば、飲



まごころを可とす

六

茲に畫けるハ、一
 人の兒童方に遊に
 出でんとさるを、其の
 母の召び止めたるこ
 ころなり 此の兒童

もー孝行なる子ならば、出づることを止
 めて、直に家に歸らん 若此のわらはは、母の
 言を聞かざして、己の欲するまゝに遊び
 めぐらば、不孝なる惡しき兒童といふべし

七

車との輪を轉して、人又ハ物を載せて
 行く器の總名なり 牛の牽くを牛車

ウシゲレマ

といひ、馬の牽くを馬車バシヤといひ、荷ニを積ツルマみて人の挽くを荷車ニといひ、人を乗せて人の挽くを人力車といふ。人力車ハ、近頃我が邦にて、創めて造りしものにして、形ハ小き馬車の如し、二人乗あり、一人乗あり、人皆其のでおる者をよろこぶ。

八

人と約してこれに背くハ、極てあさまことにして、必れほくの人にとまれ退けらるべし、故に約したることハ、必これに違ふべからず。苟カシコにも信を人に失はば、縦タトヒ學術に通じ、技藝に達せとも、一生身を立つること能はざるべし。

九

犬はよく人に馴れ、又よく恩を知る
 ものなり 西洋の國々に産するもの
 は、殊にかゝこし 生れて二年をふれ
 ば、その身全く成長す 世界の中、いつ
 くにても、犬なきところなし 犬は人
 の用をなすものにて、家を守り、獵を助

くるなど、人のよく知る所なり

十

我等の住む處を家といふ 家には
 ざしきあり、だいでところあり 坐敷に
 の疊を、しきとこのまをつけ、障子をた
 て、臺所にかまどを置き、ながしを張
 る 床の間に、かけものをかけ、花瓶



をねき、四季をり
 をりの花をさし、かま
 どのに、釜と鍋とを
 かけ、ながりに水
 瓶と手桶とをねく
 十一
 指ハ各其の名を

異にむ、大にして短きものを親指とい
 ひ、其の次にありて指し示をに便タヨリしき
 ものをびとさしゆびと名け、五指の中
 位にありて、高く抜け出でたるものを、中
 指とし、中指の次にあるものをべにさ
 し指と呼び、又其の次に位まるチヒサ小なる
 ものを小指と稱ふ

十二

人の時によりて衣服を改む あつ
 きときハ薄きものを服し、さむき時ハ
 あつきものを着る 帷子單物ハうす
 くして熱を避け、袷綿入ハ厚くして寒
 さを防ぐ 衣服を製するにハ、絹布麻布
 綿布を用ふるを常とす 絹布ハ蠶の

繭より造り、麻布ハ麻の纖維スダにて織り、
 綿布ハ、草綿の種を包める細き毛の如
 きものを紡ぎて織るなり

十三

父母を大切に、孝を盡さにつぎて、
 長上を敬ひ尊ぶべし 長上とハ、我よ
 り年長け、或ハ位高くして、我が上にあ

る人を云ふなり 長上を尊び敬ふこと
どい、まづ我が親み愛づる兄弟より始
むべし

十四

蠶の人に大なる益を與ふること
此のほか如何なる蟲にてもよく之に
くらぶべきものあらざるなり 看よ

全世界の人々、そのまゆより紡ぎ出
せる細き絲にて織りたるものを以
て衣服の料となすこと甚多きを、
我が邦のこの蟲にとめること、
支那を除きて、他國よかほく見ざると
ころなり

十五



撰津の國丹生の
 山田にて、ある時一
 足の親猿三足の子
 猿を伴ひて、畑に出
 て遊び居れり
 其の邊ホリに耕せる農
 夫戯に鋤をふりあ

げてこれを逐ひしに、親猿ハ一足の子
 猿を背にし、二足を両手にかゝへて、命
 かぎりハに逃げ去りしかど、遂に農夫に
 ねハひつめられしかば、親猿今ハかなは
 すとや思ひけん、三足の子猿を我が背
 にし身を以てねハひ農夫に向ひて、頭
 をたれ手をあはせて、助を求むる状カタチを

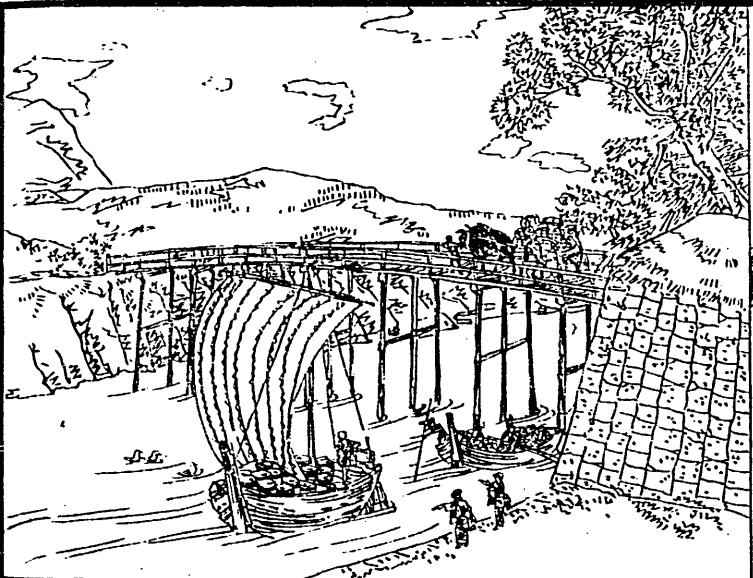
示せり 親の子を思ふこと斯の如し、
子も親を思ふ心の深きこと、またかく
あらまほしきことなり

十六

悪しき行の小児といふ家によりてい
父母の命に遵はむ、學校にありてい教師
の教に従はむ、外に遊ぶときい人の妨

を為るものをいふ 此の如き小児い
生長の後、人にうとまれ、親族に惡まれ、
我が身を立つる道なくして、貧窮に陥
るもの少からず 人々一生の幸を希
はば稚き時より、行を正しくして、父母
教師の訓を守り、學問を勉むべし

十七



此の圖ハ如何なる
 ところなりや
 小川なり 水の上
 に横はれるハ何な
 りや 橋なり 槁
 の上を通るものハ
 何なりや 牛の車

を牽きて行くなり 車に積みたるハ
 何なりや 薪と炭となり 炭ハ何を
 以て造るや 木を焼きて造るなり
 水の上に泛べるハ何なりや 船と鳥
 となり 其の鳥の名ハ何といふや
 かめめといふ 船につみたるハ何な
 りや 米と油となり 油ハ何より造

るや 多くの菜種より志ぼるなり
 船と鳥との同くむきにありや 否、鳥
 の水の流に溯り、船の水の流に随ひてく
 だるなり 汝等船を行るに用ふる器
 の名を知れりや 舵、櫓、楫、竿、帆の五な
 り

十八

家の内ウチにハ両親フタオヤと祖父ソコ祖母ハハとあり
 家の外ソトにハ親類オヤジあり 其の親類にハ
 をぢオヤジをばハあり 父の兄弟イモトをぢオヤジをば
 といひて、字ナリにハ伯父オヤジ・伯母ハハとハかき、父の弟
 妹イモをハをぢオヤジをばハといひて、字ナリにハ叔父オヤジ・叔
 母ハハと書く 母の兄イモト・姉イモメを 舅オヤジ・姨ハハと
 書き、母の弟妹イモをハまた舅オヤジ・姨ハハと書き

并にをぢをばといふ 父母の兄弟の子
 をいことといひ父かたの我より先ち
 て生れたるを後兄と書き我より後れ
 て生れたるを後弟と書き母かたのい
 とこにハ頭に外の字を加ふ 後姉後妹
 もこれに同ト

十九

今日ハ一月一日なり 風穏に日の
 光もうらゝかにして家々ハ國旗を
 掲げ門前にハ緑の松と竹とを樹て
 新志き年を祝ふ 人ハ皆禮服を着て
 東西に走り馬車人力車に乗るあり或
 ハ歩むあり あまたの子供ハ美しき
 衣服を着けて羽子を突き或ハ紙鳶を

揚げ、或ハ毬を弄べり

二十

大石良雄、幼きとき五六人の童と遊
び戯れ、折一人の童ありて、ひとづよ
り十までの數を唱へ、問ひて曰、一より
このつまでにハ皆つの字あり、十に
いたりてつの字なきハ何故ぞやと、

他の童互に顔を見て答ふるものな
し、良雄進みて曰、然り十に至てつの字
なきハ、五に二のつの字あるが故なり
と答へりとぞ

二十一

農具ハ、土地のもやうによりて、さま
ざまあれども、鋤、鍬ハ、地を耕し土を穿



つ器にして、其の用
 ひ方に隨ひて、各其
 の形を異にす 水
 田を耕す時、牛馬に
 引かゝめて土をゆ
 るくまざる器を馬
 耙バといひ、いねる

いの實を扱イき取るものを稻扱イ子コキといふ
 磴イの殻を破りて米を出さ器に
 て、唐箕イの殻と糝イとを撰り分くる器
 なり

二十二

學校にて教師の教ふる事ハ、皆童子
 等の心の中によき種を蒔くは等しけ

れば、能く心を用ひて、生ひ育たしむべし、又其の心の中に生むる、邪なる思と正しからざる志あざとい、善き種を害まべきあしき草と同どければ、務めてこれを刈りさるべし

二十三

家を建つるにハ、先石を居ゑて、礎イシタテと

し、木をけづりて柱とし、上に棟ウツリと梁ウツリとを架し、屋を葺くに瓦を用ひ、板をならべて牀とし、四方に壁を塗り、窓をあけて空氣を通はし、戸障子を設けて雨風を凌ぎ、又錠を施して盗の入るを防ぎ、坐する為に畳をしく、我等の住める家を造る法、これほむね此の如し

屋の脊に横へたるを棟といひ、これを負ふを梁といふ。棟と梁とを支へて家を持つるを柱といひ、柱の上に置く四角なる木を料マスカタといふ。其の上に桁ケダを横へ、桁を兼ねるに桁トチキを以て、又棟より垂れたる木を椽ケルキといふ。天井とい、薄き板を排べて塵を防ぐ。

處にして、戸障子をあげたてまき溝の上、に在るものを鴨居といひ、下に在るものを鶉居といふ。戸に引き戸あり、開戸あり。障子の木にて骨を作り、紙又硝子ををれり。疊タタミのわらを集め綴りて床と、表に席を着けたり。

二十四



あまたの童あり、
 森の中をかけまは
 りて、多くの小鳥を
 捕へ、これを籠の中
 にいれて、各家に持
 ち還れり。其の捕
 へたる鳥ハ雀、ひわ

なり 皆自由自在に、廣き森の中に飛
 びおけり、遊び戯れ、が、今ハ狭き籠のう
 ちにありて、翼を伸まこと能はむ、又自
 由に飛ぶこと能はむと、いと憐れむ
 べきとありさまなり。此の禽も、汝等と
 同どく、天地の間に生れたる動物に
 て、生けるを樂み死ぬるを懼るゝこと

人と同じくして、ものいふこと能は
 ざれば、怨めるか、怒れるか、哀めるか、われ
 われに、知れざれども、その心の裡に
 思ふこと、汝等と少しも異ならざる
 べし。故に罪なきものを、無益に惱し困
 ましむることなかれ。斯の如き遊ホカハ、
 己の情を満足せしめんとして、他のい

きものを惱し苦ましむるものなれば、悪
 しき遊なり。若令汝等が紙鳶を揚
 げ、獨樂を旋し、自由に遊び戯る。時人
 ありて汝等を捕へ、狹き一室に閉ぢ籠
 めちば、さぞ窮屈を感じ、定めて恨めしく
 哀しきことに思ふべし。故に吾が身を
 つめりて、人の痛さを知れとの諺を記

臆せよ

二十五

人の常に意を用ひ、勉めて身體カラダを清く
まべし。夫稚き男女の帯オビ・紐ヒモ等の解け
たると、髪カミの亂れたるとい、其の人の情
弱にして、勉めざること、或は定りたる
則を守らざる、あしき習ナリはしあること

を人に知らざるにひとし

二十六

こゝに二人のあしき少年、あまたの
蛙の住める池の邊に立てり。この多
くの蛙は、少年等に向ひて、更に害をなそ
ざれども、少年等の一足の蛙の頭を水
の面に出さを見て、直に石を擲ちたり、



此の時傍にありたる老人少年に向ひて云へるや、君等の其の石を擲つべし、樂の為なるべけれど、蛙にたりて、一命にかゝ

はることなるを思はざるかと

二十七

太陽の大なる火の球にして、光と熱とを地球に與ふるものなり。我等は、晝の間太陽を見得れども、夜はこれを見ることを得ず。汝は、夜に至りて太陽を見ること能はざるは、何故といふことを

知りや この時ハ我等の棲む所太陽に向はざるがゆゑなり 太陽ハ常に東より昇りて西に入るものにして、其の昇る時ハ晝となり、入る時ハ夜となるなり 月も亦球の如く圓きものにして、東より昇りて西に入るものなりども、太陽又ハ地球の如く大なりども 月

の大きさの太陽と同ト様に見ゆるハ、其の地球を距ること、太陽より近きがゆゑなり 月の地球の週まわりを廻るものにして、自光を放つことなし、然れども太陽の光を受けて輝くなり

二十八

人の世を渡るに缺くべからざるも

のい、衣・食・住の三なり 此の中食物を
 以て最要とす 食物とい穀物、蔬菜、果
 物及び魚肉、鳥肉、獸肉の類をいふ 是
 等の、みな多くの人手と勤勞とを經て、
 始めて吾人の食膳ふ上るものなり、故
 よ食膳よ向ふ度毎よ此の事を思ひ出
 で、たとへ一粒の飯、一片の肉よても苟カウシ

にもかろぐく見るべからず

二十九

誠ウツクの虚言を語らざるより始ると
 い、古人の言ひ詞にして、凡べての善
 き事、皆これより生ず、この心なきも
 のい、啻に人に敬はれざるのみならず、
 遂に其の身をあやまるに至るものな

ればがりそめにもうそいつはりをい
はむ固くまことを守るべし

三十

鹽の海水を蒸發して製したるもの
よして日用に肝要なること世の人の
あまねく知る所なり若これを闕くと
き人の生命を保つこと能はざるべし

其の他藥に用ひまた玻璃の器を清
くするに用ふるなり 播磨の赤穂阿
波の齋田下総の行徳等の製を最佳と
す

三十一

此の圖を見よあまたの人水田の中
に立てり 皆あしき衣服を着大なる



る笠をかぶり、鎌を
 腰にさしたり。この
 人々の、稲の間に生
 ひたるあゝき草を
 抜きつゝあるなり。
 今の夏の最中^{モナカ}に
 て、暑さつよくして

堪へ難きほどなるに、此の人々の、流る
 汗を拭ひつゝ、泥にそみてはたらけ
 り。朝夕膳に向ふ毎に、其の心づく
 のほどを想ひやりて、一粒の飯をそ
 まつにまゐること勿れ

三十二

凡人に、各其のまゝべき業あれば、

自怠りて空しく月日を過さべからず、
 故に農夫たる者ハ、土地のよきあり
 を考へ、其の地に適ふ物を植ゑ、夜も晝
 も耕す事に心を用ひて、農業を盛にせ
 んことを思ひ、工人たる者ハ、各其の
 職を勉め勵みて、くさぐさの器、いろく
 の品を作りて、各其の職を盡さんことを

務むべし

三十三

兄弟ハ同胞といひて、同ト父母より
 生れ、一トクの家トクに生長せしものなれば、其
 の親トクきこと他の人と比ぶべからむ
 兄、姉ハ、能く弟妹を慈み、弟妹ハ、能く兄
 姉を敬ウヤひ、苦クシをも樂ラクシをも共にし心を同

トく、方を戮せて、父母に事ふべし

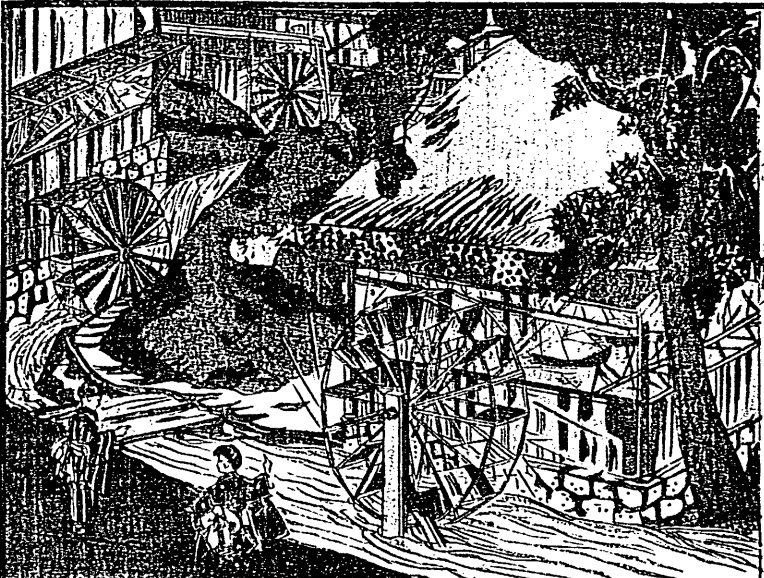
三十四

海とい、鹹き水のさしひまさる處の
總名にして、大平洋、大西洋、印度洋、南氷
洋、北氷洋等、其の大なるものなり 陸
地、或い二の嶋フタツの間、の狭き所を、瀬戸又い
海峽といひ、陸地の間に入りこみたるを、

入海又海灣といふ 又海の中に突きい
でたる陸を岬又海角といひ、海に沿ひ
たる陸を濱といふ 嶋の海の中に離れ
てある小き陸地なり

三十五

水車に三種あり 車の上より水の注
ぎ掛るへ上注車、車の中程に水のあ



たるの側注車車の
下に水の流るくの
下注車なり 各其の
力に強き弱きのあ
れどいづれも皆白
を轉し又の杵鉋鋸
篩等を動さしむ

るに用ひて大に人の力を省くものな
り

三十六

一條の絲も、工女のでわざによりて
成り、一枚の紙も、職工のはたらきによ
りて成り、一粒の米も、農夫のほねをり
によりてなるものなれば、我が衣食日用

の品、皆あまたの苦勞を経てなりしものなり。然るに、此等の事に心を用ひて、無益に物を費すは、實に如何なる心ぞや。語に曰、無益に物を費すは、水の中に投げ棄つるより甚しと、忘るべからむ。

三十七

何事をなすにも、勉むるを第一とせ、故に懈る心なく、慎み勉め、獨居ヒトリるときも、父母教師の前にあるが如く、おぼやかなく、怠の心を出さざりて、眞實の道を守るべし。かく慎み行ふ時、其の徳一家に及ぼし、其の行世間に知られて、己の幸を得ること疑なく。

三十八

こゝに風船あり あまたの人をの
せて鳥もいたなりぬ高き大空にのぼれ
り 此の船の上なる球の如きものハ、
水素といふ甚かろき氣體をこめた
る袋なり この氣ハ煙よりもなほか
ろければ自高オシカラき處にあがるなり 世

にかゝるものを造り出し〜ハ、まこと
に物の理を窮むる道のすくみ〜ある
〜なり

三十九

人と鳥獸といハ、いづれハ貴き人固よ
りたふと〜人ハ幼少の時より學問を
勉めて物のことハ、事ヨシアシの善惡を辨ふ

れども、鳥獸の然らざるが故なり

四十

書状の、公と私とを問はむ、要なる用事を書きて人に遣るものなれば、如何なる秘事のあるやも計り難ければ、猥に人の開きたる手紙に目を注ぎて、偷に観るべからむ、まして私に其の封を

開くべけんや。

四十一

商業とい、多く農と工との作りしものを買ひ、相當の利益を取り、之を他人に賣りて、我が家のくらゝをたつるものなり。然るにわるさばしき輩の、甚しき横直を、或は贗物などを賣り、

人を欺きて不當の利潤を貪り人の道
 をも顧みざれば終にハ得意先の憎を受
 け再其の家にて物買ふ人のなきに
 至りて身代を亡し父母を路頭に迷は
 しむるものあり 故に誠を守りて不
 義の行をすべからむ

讀本 第四終

明治十八年三月版權免許
 同 年六月 出版
 同 二十年四月十六日訂正

著兼出版 發 兌

普及舎

東京下谷區練堀町 拾四番地



定價十錢

賣 六十五